

平成 22 年 4 月 1 日現在

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2007～2009

課題番号：19530705

研究課題名（和文）

ヴィルヘルム・フォン・フンボルトの「教養」理念形成における社交性の問題

研究課題名（英文）

The problem of the sociality in “culture” idea formation of Wilhelm von Humboldt

研究代表者

櫻井 佳樹 (SAKURAI YOSHIKI)

香川大学・教育学部・教授・

研究者番号：80187096

研究成果の概要（和文）：ヴィルヘルム・フォン・フンボルトの『教養』理念がいかにかに形成されたのか、彼の青年期における社交性問題との関連から分析を行った。まずフンボルトらが結成した「育徳（美德）同盟」の思想史のおよび社会史的背景を明らかにした。次に「同盟」に所属した主要人物が織りなす人間関係の力学について明らかにした。それによって、フンボルトの「教養」理念の本質要因として、自立した個人と個人の結合という社交性が措定されていることが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：About “culture” idea of Wilhelm von Humboldt having been formed how, analysis was conducted from relation with the sociality problem in his adolescence. The history of ideas social background of a “virtue alliance” which Humboldt and others formed first was clarified. Next, it clarified about the dynamics of the human relations which the leading figure who belonged to the “alliance” weaves. It became clear that the sociality of combination of the independent individual and the independent individual is supposed as an essential factor of “culture” idea of Humboldt by it.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007 年度	700,000	210,000	910,000
2008 年度	400,000	120,000	520,000
2009 年度	400,000	120,000	520,000
年度			
年度			
総計	1,500,000	450,000	1,950,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教育学

キーワード：教育思想

1. 研究開始当初の背景

本研究は、「ドイツにおける『教養・人間形成』(Bildung) 概念の成立と展開」という全体構想に位置づけられるものである。ドイツ教育学の基礎概念としての「教養・人間形

成」(Bildung) 概念は、およそ 18 世紀末に成立し、多様な概念内容を含意しつつ今日に至っている。「『教養・人間形成』(Bildung) とは何か」という問いは常に繰り返されてきた歴史的な問いであり、同時にアクチュアル

な問いでもある。本研究は、その成立に多大な貢献をしたヴィルヘルム・フォン・フンボルト (Wilhelm von Humboldt, 1767-1835) の「教養」理念形成を跡づけることによって、フンボルトが、当時描いた「人間の教養」とは何なのか、を明らかにしようとするものである。

ヴィルヘルム・フォン・フンボルトは、思想家、言語学者、外交官、教育行政官などの多様な顔を持ち、様々な側面で研究されている。1810年に創立したベルリン大学の理念を今日の大学改革の現状において、どのように評価するかという観点で、常に論じられてきた。また言語学研究の最近の業績としては、斉藤渉『フンボルトの言語研究—有機体としての言語』京都大学学術出版会、2001年などがある。またフンボルトは、フランス革命直後のドイツ・フランスの政治的・社会的状況を踏まえて、人間形成を重視した国家論(『国家機能限界論』1792)を執筆したが、その現代的意義については、ドイツ本国でも研究されている(Dietrich Spitta: Menschenbildung und Staat, 2006 参照)。さて、研究代表者がこの研究を開始するにあたって、注目したのは、Peter Weisz: Beziehungserfahrung und Bildungstheorie, 2005である。この著作は、1787-1797年におけるヴィルヘルム・フォン・フンボルトとその妻カロリーネとの往復書簡を丹念に読み込む中で、両者による経験がいかにフンボルトの「教養」理念形成に寄与したかを明らかにしようとしたものである。

こうした文献を手がかりに研究代表者はヴィルヘルム・フォン・フンボルトの『教養』理念がいかに形成されたのか、とりわけ彼の青年期における社交性問題との関連からより詳細に分析をおこなうこととしたのである。「育徳(美德)同盟」を介して出会い、婚約・結婚に至った二人だが、その具体的な事実等がフンボルトの「教養」理念形成に、とりわけ彼の『国家機能限界論』などの初期の著作等がいかに組み込まれているかについて、本格的に研究している研究は寡聞にして知らない。その意味でフンボルトの「教養」理念の形成過程を明らかにする上で本研究は独自性を有するといえる。

2. 研究の目的

本研究の第1の課題は、フンボルトらが結成した「育徳(美德)同盟」(Tugendbund)の思想史的・社会史的背景について明らかにすることである。モーゼス・メンデルスゾーンに代表される当時のベルリン啓蒙主義の影響、ベルリン・サロンにおける社交性の実態、読書協会でのゲーテ文学を読むということ、などを手がかりに研究を進める。第2は「育徳(美德)同盟」に所属した主要人物(ヘン

リエッテ・ヘルツ、ドロテーア・シュレーゲル、ヴィルヘルム・フォン・フンボルト、カロリーネ・フォン・ダッヘレーデン等)が織りなす人間関係の力学並びにこの組織の特徴について解明することである。個々の友人関係から発展し、お互いに面識のない者たちを含む組織が生じた。これは公開を前提にした書簡交換によるある種の「信頼」(ルーマン)を前提にしたネットワーク社会であったが、ここに親密圏と公共圏(ハーバーマス)が様々に交差する。その不安定さの中でバランスを取っていた同盟がいかに成立し、崩壊したのか、解明する。そして第3は、フンボルトと妻カロリーネの往復書簡を分析し、友愛・愛についての理論と実践がいかにフンボルトの「教養」理念形成に寄与したかを解明することであった。

3. 研究の方法

フンボルトやその他「育徳(美德)同盟」に関わる人物の書簡や二次文献をドイツ国内はもとより日本においても収集し、それらを精読するという文献研究の手法によって行った。なお、研究代表者は、フンボルトの「教養」理念の形成過程を思想的・社会史的にアプローチした。出来上がった彼の理論や業績を表面的に理解するだけでは、その真の意味内容に達しないと考えるからである。したがって、彼のテキストをコンテクストを含めて(構築しつつ)理解することが課題となった。

4. 研究成果

まず第1に、フンボルトらが結成した「育徳(美德)同盟」の思想史的・社会史的背景を解明するために、ドイツ啓蒙主義の代表者モーゼス・メンデルスゾーンの思想と行動を明らかにした。とりわけ1784年『ベルリン月報』に掲載されたカントとメンデルスゾーンの2つの「啓蒙」論文を起点として、「啓蒙とは何か」という問いがいかに成立したか、その経緯を(メンデルスゾーンが名誉会員として参加していた)ベルリン啓蒙主義サークル「水曜会」での議論を辿ることにより、メンデルスゾーンの啓蒙理解の特質を解明した。

メンデルスゾーンを含むベルリン啓蒙主義サークルにおける啓蒙をめぐる議論は、カントの議論ほど現代思想に対して影響力を有していないが、1780年代半ばのドイツ啓蒙主義者の意識の特質を理解する上では重要な手掛かりを与えてくれるといえるだろう。啓蒙を推進しつつもいかに啓蒙すべきか、また現状の偏見をどう利用すべきか等、今日においても妥当するような課題に直面していた。つまり当時すでに「啓蒙の弁証法」は意識されていたのである。啓蒙が道徳や宗教の

破壊につながらぬように、慎重に啓蒙を進めようとしていた点にドイツ啓蒙主義の特質を見ることができた。

次に「育徳（美德）同盟」に所属した主要人物が織りなす人間関係の力学並びにこの組織の特徴について解明するため、ベルリンサロンの最初の主催者であり、この同盟の結成・運営に中心的な役割を果たしたヘンリエッテ・ヘルツとフンボルトとの関係に焦点を当て、フンボルトからヘンリエッテ・ヘルツに宛てられた書簡やヘンリエッテ・ヘルツの回想録を分析することを通して、両者の交友関係がいかにフンボルトの「教養」理念形成に寄与したかについて解明した。

ヘンリエッテ・ヘルツ（Henriette Herz, 1764-1847）は、ポルトガルからハンブルクを経て移住してきたユダヤ人家族の出身であり、ユダヤ人病院の最初の医師ベンヤミン・ド・ルモスの8人兄弟の3番目の娘としてベルリンに生まれた。ヘンリエッテ・ヘルツの社交界における人生は、まだ13歳にならない年にユダヤ人医師であり、カントに師事したマルクス・ヘルツと婚約し、1779年12月1日に結婚してから始まった。夫マルクス・ヘルツの周りには哲学や自然科学を論ずる啓蒙主義者たちが集まる一方で、夫より17歳も若い美貌のヘンリエッテ・ヘルツの周りには疾風怒濤文学に没頭する男女が集まったのである。こうしてベルリンに最初のサロンが1780年開かれた。

ヘンリエッテ・ヘルツは回想録においてフンボルトとの出会いについて次のように述べている。「私がヴィルヘルムに与えた印象は消えがたいものであったと見え、私たちは文通するようにもなった。私は非常に冷静だったので、非常に冷静に彼に手紙を書いた。しかし彼はあまりそうではなかった。「私たちが知り合ってからすぐに、彼は私に従った。彼は当時おおよそ17歳であった。そして私は数歳だけ年上だとはいえ、私は女であり、結婚していた。したがって、はるかに彼より大人であった。…私は彼をいわば世の中へ手ほどきしたのである」。

それに対して、フンボルトはヘンリエッテ・ヘルツをどのように見ていたのだろうか。フンボルトによるヘンリエッテ・ヘルツ宛ての書簡は、ラーエル・ファルンハーゲンの夫、カール・アウグスト・ファルンハーゲン・フォン・エンゼの遺品として、彼の姪ルードミラ・アッシングによって編集された書簡集に掲載された。そこには27通の書簡が掲載されているが、1780年代半ば以降に知り合ってから、1792年に至る「育徳（美德）同盟」（Tugendbund）の時期にあたるものばかりである。

フンボルトは、ヘンリエッテ・ヘルツが暗示するように、彼女に対して「情熱的」であ

った。しかしながら、ヘンリエッテ・ヘルツによる表層的な理解とは異なる印象を持つ。第1書簡（テーゲル 日曜日午前）には、「今や、火曜会（Dienstag-Gesellschaft）が始まった。私は、あなたと知り合った。そしてこのことは、私の人生の中で最近の重要なエピソードである」と述べている。また第2書簡（テーゲル 土曜日午後）では、「私の不満の最大の原因は私自身の中にある」として、将来有用な人物になるべきであるという周りからの期待（使命）に対して、孤独への願望を語っている。しかも「私の唯一の願い、私の唯一のあこがれ、私が考えることのできる唯一の種類の幸福は愛することと再び愛されることであるが、この幸運を私は決して享受しないだろう。…原因は私の中にあり、私はそれを変えることはできない。もし私がまさに私のような女の子を見つけたとしても、私自身ほとんど愛さないだろう」とまで自己嫌悪を示している。フンボルトにとってこうした危機的状態（運命）にヘンリエッテ・ヘルツが関与してくれたことへの感謝を述べ、朗らかな「この展望を私に提供するのにはあなたが私に示す友愛 Freundschaft である」と述べるのである。このように当時フンボルトは精神的な危機に落ち込み、そうした内面を語る「親密な」人物としてヘンリエッテ・ヘルツを発見したと言えるのではないだろうか。しかもこの内的な関係は相互行為的であった。つまりフンボルトの内面ばかりでなく、ヘンリエッテ・ヘルツの内面の吐露も行われたようである。ヤネツキーによれば、この「極端に誇示された感情は、全くの時代現象であったこの同盟の本質をすでに示している。徳と愛は、高度の内面性、主観性、および心情を前提とした理想であった」。またデュルメンによれば、「啓蒙主義の手紙はその主観性が際立った特徴になっている。書き手は自分の精神状態と内面的な経験や確信、いや個人の問題を深いところまで見せてくれる。…その点、主観的な感情と感覚をもっとも執拗に語りつづけたのはシュトルム・ウント・ドラング時代である」。おそらくゲーテの『若きウエルテルの悩み』をヘンリエッテ・ヘルツのサロンで朗読したことなどが影響を与えたと推測できるだろう。

このようにフンボルトとヘンリエッテ・ヘルツの「親密な」関係は個人的な関係を超越して、時代背景や「育徳（美德）同盟」としての規則に基づく側面をも反映していたと言えるだろう。フンボルトはヘンリエッテ・ヘルツとの関係を通して、また愛を通じて徳を高めるという同盟の理念や実践を通して、フンボルトの中に「教養」（人間形成）という概念を彫琢するための素地が培われたと言えるのではなかろうか。

そして最後に、「育徳（美德）同盟」がめ

ざした理念と現実について明らかにするとともに、そこでの経験を通してフンボルトが得たものとは何だったのかについて解明した。サロンが基本的に来客に対して開かれた性格を持っているのに対して、一方で秘密裏に会合を重ねる組織「育徳（美德）同盟」をヘンリエッテ・ヘルツらは設け、フンボルトをその一員として迎えた。しかし実態としては、メンバーの多くがベルリン以外に居住した書簡によるネットワーク組織であった。ジドウによれば、同盟者たちは互いに内面を遠慮なく開示し、最もデリケートな感情の動きを分析したが、それは彼らが互いに面と向かって対峙するよりもずっと前だった。つまり互いに面識を得る以前に、親密な会話を書面によって交わしていたことになる。ドゥ (Du) が、すべてのメンバーたちを結び合わせ、暗号が考案され、規約が定められ、最も深い秘密が開示されることが求められたのである。この同盟はより親密さを求める実験場であり、閉じた性格を有していたと言える。親密であるからお互いの秘密を打ち明けたわけではなく、親密になろうとして、親密にならねばならないという思いから、面識がない場合であっても互いの秘密を打ち明けたのである。またそのため、兄弟姉妹のごとくドゥ (Du) を用いて、各人は他の者にすべての「魂の感情」(Seelenemotionen) を伝えるべきであるという「規則」が作られ、それが将来的にお互いを縛ってしまうことにもなった。

1789年3月20日に、カロリーネ・フォン・ボイルヴィッツ宛ての書簡でフンボルトは、次のように言う。「私たちの目的は、私たち自身の陶冶 *ausbildung* であり、私たちの内なる道徳的感性を高めることである。私たちの方法は、友愛 *freundschaft* と愛 *liebe* である。しかしながら、そのためには自由が必要である。自由なしには、あの完成は大きくなり得ないし、自由なしには友愛と愛が成長しないのである。したがって、私たちの場合の第一法則は、自由であらねばならないし、この自由を制限するすべてのものはその目的に反している」。

カロリーネ・フォン・ダッヘレーデンから最初の書簡（1788年7月28日、ブルクエルナー発）を受け取った時はまだ互いに面識がなかったが、その後数回の出会いや主に書簡のやり取りを通して、互いを理解し合い、やがて1789年12月16日の婚約へ、そして結婚（1791年6月）に至るのである。この出会いはフンボルトにとって、「育徳（美德）同盟」の間違いない「成果」であったが、この同盟自体はその後解消されてしまったのである。

「人間の真の目的は、—それは変わりやすい傾向ではなく、永遠に変わらない理性が指定するのだが、人間のもつ諸力を最高にしかも最も調和のとれた、一つの全体に形成する

ことである」。

フンボルトは1792年に『国家機能限界論』を執筆し、その中でこのように人間の「教養」理念をうたい上げ個人の調和的完成がなされるよう、国家は自らを限定づけるべきだと主張した。そのために必要な条件として「自由」と「状況の多様性」をあげる。「いくら自由であっても、またどんなに独立した人であっても、単調な環境におかれていたのではあまり発達しない」。「誰でも一度に一つの力だけを働かせることができる、あるいは、人間の全存在は同時に一つの活動だけに向けられる。したがって、人間は一面性へと規定されているように見える…」からである。こうした条件の下、個人の「形成」を促すのは、フンボルトによれば「他者との結合」*Verbindung mit anderen* である。「存在者の内部に由来する結合によって、人は他者の豊かさを習得しなければならない」。そのような「性格形成的結合」の例として「両性の結合」を挙げている。しかしまた「そのような結合が形成上効果があるか否かは、つねに結合の親密さと同時に、結合されている者の自立性が維持される程度にかかっている」。

以上のように見ると、フンボルトの「教養」理念の本質要因として、自立した個人と個人の結合という社交性が措定されていることが明らかである。人間の出発点としての個性（一面性）が他の個性（一面性）と相互作用することによって、次第に人間として釣り合いが取れていく過程を、フンボルトは「教養・陶冶」と理解したのである。それは、同盟を通じて知り合い、後にフンボルトの妻となるカロリーネ・フォン・ダッヘレーデンとの友愛・愛を介して生じたものであると言えるだろう。

以上の研究成果を「ヴィルヘルム・フォン・フンボルトの『教養』理念形成における社交性の問題」と題して、教育哲学会第52回大会（於：名古屋大学）にて発表した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計2件）

- ① 櫻井佳樹「フンボルトとヘンリエッテ・ヘルツ」中国四国教育学会『教育学研究紀要』（CD-ROM版）第55巻、2010年、6-11頁
- ② 櫻井佳樹「ドイツ啓蒙主義とモーゼス・メンデルスゾーン」中国四国教育学会『教育学研究紀要』（CD-ROM版）第54巻、2009年、25-30頁

〔学会発表〕（計4件）

- ① 櫻井佳樹「フンボルトとヘンリエッテ・ヘルツ」中国四国教育学会第61回大会、2009年11月21日、島根大学

- ② 櫻井佳樹「ヴィルヘルム・フォン・フンボルトの『教養』理念形成における社交性の問題」教育哲学会第52回大会、2009年10月18日、名古屋大学
- ③ 櫻井佳樹「ドイツ啓蒙主義とモーゼス・メンデルスゾーン」中国四国教育学会第60回大会、2008年11月30日、愛媛大学
- ④ 櫻井佳樹「ヴィルヘルム・フォン・フンボルトの『教養』理念形成における社交性の問題に関する研究ノート」贈与と交換の教育人間学研究会、2007年7月7日、京都大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

櫻井佳樹 (SAKURAI YOSHIKI)

香川大学・教育学部・教授

研究者番号：80187096